

郷土室だより

第138号

平成22年11月15日

編集・発行

中央区立 京橋図書館

東京都中央区築地1-1-1

電話 3543-9025

刊行物登録番号 22-000

「変りゆく都市像」(17)

《種々な市》

◇〔纏向遺跡〕の原形

平成二十二年に平城遷都1300年目の賑わいを見せた奈良市をはじめ、奈良県内の《古都遺跡》は、それを契機に改めて三世紀始めころから形成された纏向遺跡（奈良県桜井市）の範囲や、その周辺に新しい光が当てられるようになった。とくに全国の前方後田墳のあり方の基準にされた「箸墓古墳」や、朱塗りの石室で有名な「桜井茶臼山古墳」などを始めとする古代遺跡・遺物の豊富な出土地は、日本の古代史に関心を持つ者にとっては広く知られていた場所であった。

去年（2009年）の秋、その纏向遺跡群の一角に東西に軸線を持つ巨大建物群が存在したことが新たに確認されたことが公表された。新聞報道によるとその内容は単純な居住施設などではなく、場所としては前記の古墳群に隣接していることなどの特徴から、邪馬台国の中心地の施設の一つだったという見解が生れたという。

そうした見解が生まれるまでの状況を、ここでごく簡単に復習的にさらってみる



纏向遺跡群略図

と、まず纏向だとか箸墓だとかという考古学の門外漢にとつては単なる奈良県下のあまり聞きなれない一地方の地名と、それにまつわる《はなし》の解説が必要になるだろう。

まず纏向遺跡の位置と範囲を説明すると、JR桜井線の巻向駅の周囲一帯だといえよう。さらに巻向駅の南の三輪駅の東に三輪山があり、山そのものが日本最古の神社である大神神社＝三輪明神の神体とされ、一種独特な雰囲気を持つ場所として尊崇されている。

しかし明治初めの廃仏毀釈によりその山の周囲にあった平等寺・大御輪寺などの大規模な神宮寺（神社所属の寺院）は廃止されて、神宮寺所蔵の多くの仏像などは付近の寺社に流出した。その代表的な例は聖林寺（JR桜井線・桜井駅の南）に現存する「天平の仏像彫刻の代表」とされる「十一面観音」も大御輪寺から移されたものだったことなどは案外に知られていない。

そうした変遷はさておき、大三輪の神とその妻の倭迹迹日百襲姫命についての伝承をごく簡単

に紹介しよう。多分、大三輪の神とはこの付近一帯の王であり後出の『日本書紀』の「倭大国魂神」オオモノヌシノカミだと考えられる。そして、これもこの付近の豪族の娘がこの大三輪の神の妻になつたのだが、その妻の大きな疑問は夫・大三輪の神が妻の元に通ってくるのは夜だけで、昼間はいなくなる不思議さであった。いろいろな手段（櫛入れのフタなど）でそれを解明したところ、夫は人ではなく蛇だということが分かる。その事が妻に知られると夫は妻から去っていった。

夫に去られた妻は悲しんで箸で陰を突いて死んだ（それゆえに箸墓と呼ばれるようになる）。その墓の石は昼間は人が、夜は神が二上山（または大坂山＝大阪府柏原市）の石を手渡しで運んで造つたといふ（『日本書紀』）。そしてこの墓の主はヒミコの墓とも土師氏の墓とも言われてきた。

この話の「夫は実は蛇だった」「神または夫は蛇体説」という話はかなり普遍的・類型的な説話である。また《蛇》の追跡手段に使われた櫛が、針と糸などの場合

を含めて同じような話はかなり知られている。また三世紀ころから夫は妻の家に通ってくる風習があつたことも、改めて確認出来る説話でもある。

とにかくある場所に大きな墓や国の重要な施設ができる場合は、この纏向遺跡群の例のようにその場所は墓の集中地帯（遺跡群の成立）になりやすいことも実状で立証される話でもある（神・人の昼夜分業の墓造り）。

そしてこの遺跡群が成立した時代は、当時の書誌学的に言えば「三国志」の「魏志倭人伝」に書かれた邪馬台国の時代に相当することから、これまで長らく論争の的であつた邪馬台国の場所の存在をめぐる「北九州」説と「畿内」説の論争において「畿内」説が有力視され始めるという新しい状況も生じてきた。

なお付け加えれば纏向遺跡群には主に吉備・出雲・東海などから土器が大量に出土していることである。このことは二上山などから必要に石を「手渡し」で運んだという話の実態は、大勢の人々が

中国地方や東海地方から動員されてきたことを意味するものと考えられる。それは当然自然発生的な「市」が成立していたことを物語るものと考えられる。

こうした纏向遺跡群の特徴とともに前号の諸国の「風土記」の中で「市」の在りかたの再検討に続いて、ここではあえて、考古学の方法ではなく「記紀」を始めとする資料の再検討を続けることにする。

なぜ少なくとも千三百年前の「市」の在りかたにこのようにこだわるのかというと、西欧近代製の経済学に起源を持つ、現在の世界の「市」を説明する「市場原理」が、その実情において破綻をきたしているという現実があるためである。

◇「日本書紀」では

前からこのシリーズで述べてきたように、当たり前のことながら「魏志倭人伝」は魏王が倭人国の実情を調査する目的の下に調査団を派遣した結果を編纂した「地理書」である。その調査のための

コース・日程の記述、とくに方向を「東」と書けば問題がないのに「南」と書いたために「北九州」説と「畿内」説の論争が生じたという見解もまた一般的である。

ところが「日本書紀」には当時の被調査国側の事情として、魏の調査団の逆コースの記録が豊富に含まれている。その一例は纏向遺跡群成立のキツカケになつた崇神天皇（御間城入彦五十瓊殖天皇）の業績を書いた「日本書紀卷第五」では、その皇女の「話」以前の記事を拾ってみると、次のようなことが書いてある。これを神話のように九州からヤマトに進出できた天孫族が、先住民との融和に苦心した話として読むと、興味ある状況が出現する（以下はその概略）。

六年 天皇（崇神天皇）は国内に疫病が多く出て統治不安になつたため、天照大神・倭大魂二神をその住まいに祀つたが「ともに住みたまふに安からず」という理由によつて、二神を「住まい」から分離して天照大神は倭・笠縫村に祭り、大魂（先の三輪の大神）は淳名城入姫命に託けて祀ら

せた。

七年 それでも統治不安定の状況は解消しなかつたために、「八百万の神を集めて占問い」をする、大物主神が倭迹迹日百襲姫命に憑り、「我を敬し祭れ」という神託が出たので、それを祀つたがさらに験はなかつた（この姫が前出の箸墓に葬られた女性のことである）。

秋八月、大物主神の子の大田根子命を大物主神の祭主とし、長尾市を大魂魂の祭主とする。その結果、疫病は止み五穀成就して国中が安定したとある。ここに「長尾市」という人物が登場することに注目したい。長尾市の出現で天孫族と先住民との融和の場所が出来たと読むと市場の効用がよく分かる。

また纏向については次の「日本書紀卷第六 垂仁天皇（活目入彦五十狭茅野天皇）」の部には、「冬十月に、更に纏向に都をつくる。是を珠城宮と謂う」とある。この纏向について諸書の地名考証を見

奈良県桜井市北部、もとの纏向村（付近）ということに尽きよう（それに付け加えて「延喜神名式」では巻向坐若御魂神社の所在地である（その珠城宮の珠は美称）。繰り返すようだが、大系本『日本書紀』の崇神天皇十年の条の注三五では「倭迹迹日百襲姫命の箸墓のある所。長岡は一説には巻向山の尾崎だ」とある。

このほか「釈十所引尾張風土記 逸文」・「延喜諸陵式」・「古語拾遺」・「帝王編年記」・「大和志」などでの地名考証があるが、大筋では大同小異である。

これも「纏向に都つくる」とあるように直接大掛かりな土木工事が可能な地理的条件と、社会的条件の出現、つまり纏向は市場が成立できる条件の地だったことを物語る記事だといことが出来る。

◇天皇陵の謎

ここで思い出したのが古い新聞の切り抜きであった。手元にあるそれは昭和六十一年（一九八六）九月始めから十二月下旬まで「読売新聞」夕刊の文化欄に掲載された「天皇陵の謎」（以下「謎」と略記）の切抜きを製本した資料である。54回に及ぶ連載で筆者は同社文化部の矢沢高太郎氏である。矢沢氏は長らく考古学関係を担当されていて、私はその記事の愛読者、いわばファンだった（なお同氏による「統・天皇陵の謎（32回連載）」もある）。

この二十四年前の古い新聞記事の切抜きをここに持ち出した理由は、矢沢氏と私とはほぼ同じ世代に属していたことと、私もほんのちよつとだけが考古学の門前の小僧を務めたことにある。この二つが同氏への親近感となり、その手による記事に関心を持つようになっていた。

このような思い出はさておき、去年（09年）秋の纏向遺跡の新事実発見の報道を見たときに「天皇陵の謎」のことをまず思い出した。さっそく取り出してみるとその10・11回目に宮内庁による「主な陵墓古墳の名称（その1・その2）」の表があり、それには合計四二の陵墓古墳の「宮内庁名称」と、その古墳の所在地が挙げられている。

その内容は、おおむね「日本書紀」巻第四の大日本根子彦国牽天皇（まほろみみこと）孝元天皇の皇后鬱色謎命（みこと）の第三子の倭迹迹姫命の墓とし、宮内庁の名称では倭迹迹日百襲姫命大市陵（箸墓・奈良県桜井市）を筆頭に天皇陵に擬される陵墓がリストアップされている（なおこのリストの最後には「宮内庁名称」での平城天皇陵で、その古墳名は市庭（奈良市とある））。

庭という表記があることに、こゝでも「市」の意味を物語る鍵を突きつけられた思いがした。そこに昨年（2009）秋に「東西に軸線を持つ巨大建物群」が新発見されたという報道を見ると、その感を更に強めた。

つまり箸墓古墳のような大規模な墓を築造するためには、人と物の集散機能を持つ施設がなければ大建設は不可能だったわけで、宮内省名称での「倭迹迹日百襲姫命大市陵」という《都市》の表現はそれなりに成立までの状況を忠実に表していると考えるのである。

「謎」10回目《表記法に妥協はない》、11回目《贈り名は漢風と倭風》の見出しで「宮内省名称」と《事実》とのギャップを取り上げているのだが、ここではそのことはさておき、箸墓古墳の名で知られる「倭迹迹日百襲姫命大市陵」の「大市」という表記に驚いた。この宮内庁資料で作られた陵墓表の最初が大市、最後は市庭なのである。

この数年、《変りゆく都市像》と題して、都市とはなんぞやという

視点から「都市とは《いちば》にほかならない」という事実を追跡してきた者にとって、前項で見た「長尾市の存在に加えて、箸墓古墳の「宮内省名称」にも「大市陵」、さらに平城天皇陵の所在地にも市

庭という表記があることに、こゝでも「市」の意味を物語る鍵を突きつけられた思いがした。そこに昨年（2009）秋に「東西に軸線を持つ巨大建物群」が新発見されたという報道を見ると、その感を更に強めた。

つまり箸墓古墳のような大規模な墓を築造するためには、人と物の集散機能を持つ施設がなければ大建設は不可能だったわけで、宮内省名称での「倭迹迹日百襲姫命大市陵」という《都市》の表現はそれなりに成立までの状況を忠実に表していると考えるのである。

また「日本書紀」巻第六の垂仁天皇二十五年の条には「大倭大神を祭らせるため淳名城稚姫命に命じて神所を穴磯邑に定め大市の長岡岬を祠まつる」とある。この「おほち」は「和名抄」には《城上郡大市郷（於保以知）、今は奈良県桜井市芝付近》とある。

この大市と呼ばれた場所は『日本書紀』では明らかではないが《漢文》特有の論理からすれば大市があれば必ずそれに対照する中市、または小市の存在があったはずだ

がこの小市が『魏志倭人伝』にある「国国市あり」と表現された、邪馬台国内のそれぞれの国に見られた小規模の「市」だったのかもしれない。また市庭は130号で取り上げた中世の「武蔵の場合」の項とそれに続く「市庭之祭文」の項の市場の表記「市庭を思い出させる。

◇市と屯倉（みやげ）

これまでに各所・各種の市場の特徴を反映する「いちば」の名称を見てきた。「市」の規模の大小、高市で代表される地形の特徴による表現（海石榴市（うま）・椿市（つばき）など）や、古市・旧市などの新旧別などへの言及をしてきた。以下この項では「市」が成立するまでの条件の一つとして諸国の官設の屯倉を取り上げてみよう。

国語辞典では「みやげ 屯倉・官家」とは「稲穀を納める官の倉の意」「一 大化時代ヤマト政権直轄の田畑、自ら畿内に開発したものの、地方豪族が所領の一部を献納したものの、中央から管理者を派遣して管理したもの」などと屯倉の成因は多彩であり、さらに「二

官家とも書く、書紀によればヤマト政権が朝鮮南部の諸国に置いた直轄地（うちつみやげ）であり、つぎに「三 朝廷のこと、枯野と名づくるは伊豆国の貢ぐ所の船なり（応神紀）」などであるが「日本書紀」巻第十八（安閑天皇元年の項）に次のように諸国の屯倉の設置状況が記される。

天皇はその重臣である大伴大連（おほとものおほむら）金村に、「自分は四人の后を持つが今になつても嗣（みつぎ）なし」と嘆いた。後の身分は天皇に等しいが、後宮にいられるために、後の名は外部にはその名が知られなかったことを嘆いたのである。金村はそれに答えて后に屯倉を賜ることを提案し、それが実現したことを述べている。（以下次号に続く）
（鈴木理生）

お詫び

前号137号のタイトル「変りゆく都市像」(17)風土記の中の市場は「変りゆく都市像」(16)の誤りでした。訂正しお詫び申し上げます。